

久しぶりに飛行機に乗ったせいか、寝不足のせいか、シンガポールの空港で食べた食べ物のせいか、飛行機から降りると頭痛と腹痛に見舞われた。

トイレに駆け込み戻ってくると、親友の姿が見つからない。私たちはこのまま30分くらい離れ離れになっていた。しかしやはりテレビパシーというものは伝わるもので、すぐに再会を果たすことができた。

ジャカルタ空港に着いた瞬間、一気に（気配のようなもの）がその前にいた国々と違うことに気づいた。ここは、イスラム教の国。ムスリムの国。女の人はみんなターバンを巻き、ドレスを着ている。私たちはいま、インドネシアにいるのだ。。。



ブルーバードタクシーに乗って友達のオフィスに向かっている間、私はずっと目を閉じていた。いつもながら、新しい国に入ったとき、慣れるのに時間がかかる。

その国の雰囲気や気候、風土などの微妙な違いを、身体はしっかりとキャッチしているのだ。そしていきなり飛行機で降り立ったとき、わたしの身体はその変化にまだ対応することができない。そのため、頭痛やだるさなどがもろに身体にくる。

ジャカルタを訪れたのは、ここで働く友達に会うためである。

彼女は短期大学を卒業後、インドネシア政府の奨学金をもらい語学留学し、現在はジャカルタで社会人6年目である。

彼女の専用運転手の（ちょっと荒い気味の）運転で彼女の家に着くと、まるで自分の家に着いたかのような気分になり、すっかりリラックスして、そのままソファで眠ってしまった。



彼女が帰ってくると、これまでの旅での様々な物語を、わたしは一気に一生懸命に伝えた。鹿兒島の女の子が三人そろつと、海外でも自然と鹿兒島弁が止まらなくなるものである。私たちは笑いあった。

彼女の家では、貴重品の心配もしなくてもよいし、どこに行くかの段取りもたてる必要はない、完全にリラックスしていた。リラックスし過ぎていたといっても過言ではない。

翌日、溜まっていた洗濯物を洗濯機に放り込むと、もっぴりりの鹿兒島県出身の友達も加わり、私たち鹿兒島おごじよは4人で車に乗って、食事、映画を見に出かけた。

ここでは、映画はとても安い。私たちが見た映画は日本や中国でまだ公演されていないもので、350円で見る事ができた。

鹿児島の方達4人で映画館に座っていると、まるでミニシアターでも来ているような錯覚さえおぼえた。しかし、映画のあとに、「ここでもテロが起きるかと思って少しドキドキしてた」という友達の声を聞くと、いま、先週外国人を狙ったテロが発生したジャカルタにいるのだということをはっと自覚した。

当時犯人はカナダ人に抱きつき、一緒に自爆した。死者の数は10人程度であったが、爆発があったところは彼女の働いている会社のすぐ近くだったという。私は身も震える思いになった。今、世界は、いったいどこまで安全ではなくなっているのだろうか。

ジャカルタからスラバヤへ

楽しい時間はあっという間に過ぎ、この安全で鹿児島弁の聞ける温かい家を離れなければならない日が来た。

二日間ジャカルタに滞在した私たちは、翌日の午後、1000もあるインドネシアの島のひとつスラバヤに飛ぶために、友人の家を離れた。

空港では、メールの通知と異なるターミナルから乗ることになっており、フライトは三時間遅れで、飛行機に乗る前から精神的に疲れていた。

しかし、スラバヤの空港で Eddy に会って、再会のハグを果したとき、すべての疲れが吹っ飛んでしまい、これからはじまる冒険の期待へと変わっていた。

Eddy USHAKU

90年生まれの Eddy と出会ったのは、大学4年の夏、アメリカを一人旅していたときである。

カジノの街ラスベガスのホテルで、私たちは出会った。カリフォルニア生まれの彼は、実は親はベトナムに住む華僑で、彼が生まれる前からアメリカに移り住んできた。

私たちはホテルで出会ったのち、もうひとりの日本人、しゅうへいさんと共にレッド・ロック・キャンオンに行った。Eddy が運転してくれた。

出会ったばかりの三人だったが、一緒に壮大な景色を見て、大きなアメリカンピザを食べて、距離は一気に縮まった。

そしてまさか、ここインドネシアのスラバヤ島で彼と再会できるとは想像もしていなかった。

ここでの彼との出会いが、私の人生にとって忘れられない、大きな一歩になることを、この時はまだ予想もしていなかった。



Madura 島くちりん

スラバヤから、バス、タクシー、船、そしてまたタクシー、三時間の移動の末に着いたのは彼の働いている学校のある Madura 島。

彼は、大学を卒業したあと、この Peace Teaching プログラムに参加し、二年間インドネシアの僻地で英語を教えるというボランティアを行っている。

Madura 島はインドネシアの中でも田舎で、ムスリム色の強いところである。ジャカルタでは厳しい規定はなかったが、この島では、私たちはこの島のムスリムの文化にのっとって生活をしなければならぬ。

Eddy に会った最初の夜、彼からここでの様々な文化を教えてください、私はただただ驚きながら聞いていた。

1. ムスリムの文化では、女性は肌を見せてはいけない。私たちはターバンを巻く必要はないが、この蒸し暑いインドネシアでも長袖長ズボンを着なければならぬ。
2. 食事の時や握手の時、必ず右手を差し出さなければならない。インドネシアでは、トイレの時にだけ左手を使う。左利きのわたしでも、間違っても左手で箸を握ってはいけないと肝に銘じた。
3. 女性と男性は夜一緒に歩いたり、軽いボディタッチもしてはいけない。
4. ここでは女性の地位はとても低い。男性社会である。
5. その他にも、目上の人に会った時の挨拶の仕方など、初めてのことはからをEddyに教えてもらった。一日では覚えきれないほど、たくさん注意事項があった。

不安を抱えたまま、私たちはホテルで眠りに就いた。インドネシアで泊まる最初で最後のホテルである。明日からはいよいよホームステイの日々が待っている。。。

学校見学 ムスリムの高校へ

翌日、5時にEddyがホテルまで迎えに来ると、私たちはホームステイ先の家に荷物を置き、全校朝会に間に合うように学校へと向かった。ムスリムの高校である。



彼はここで英語を教えるべく10ヶ月。いまでは、学校や近所で会った人みんながEddyに挨拶をしている。

彼の笑顔は、本当にキラキラと輝いていて、周りのみんなを自然と笑顔にする。

Nice to meet you!

全校朝会の前に、私たちは校長室に案内され、校長先生と4人の副校長先生に挨拶をした。

私たちは、この学校に来た初めての日本人だそうだった。私たちは、先生の手の甲を手に取り、自分の額にその手の甲を当てた。これはこの挨拶の仕方だ、Eddyがするように見よう見まねでやってみた。

先生方はその手を自分の胸に当てた。学生たちも、Eddyに会って話をする前は必ずEddyの手をとり、自分の額に当てたり、手の甲にキスしたりした。なんと綺麗な挨拶の仕方だろう。私たちは感動した。

私たちはEddyの担当する授業と一緒に出るようになった。教室に入るとみんなわーっと声を上げた。みんな目をキラキラさせてこっちを見ている。私たちはひとり一人Eddyに紹介してもらった。

そして、学生から日本について、私たちについて、英語で質問を受けた。彼らの笑顔に、私たちの緊張はなくなっていた。写真を撮ることが大好きな彼らは、私たちと写真を撮りたがり、授業のあとは撮影会になった。なんだか有名な人にもなったようだった。

もう一人のEddyの仲間

お風は副校長先生たちに誘われて、一緒に食事をした。食事から戻ってくると、次の授業まで時間があり、私たちは語り合った。

Eddy。ラスベガスで出会ってから三年、私たちはお互い自分たちの道を歩み続けた。私は中国の大学院へ、彼はアメリカを飛び出してインドネシアへ二年間のボランティアだ。

そんな彼が、異国で奮闘する姿を、アメリカにいたときはまったく想像もできなかった。そして、現在の彼の生活を目の当たりにしたとき、言葉以上に学ぶものがあった。彼の現地での生活、彼の笑顔から、私は言葉では表せないほど、数え切れないものを学んだ。

彼はこのプログラムから毎月10万円程度の給料をもらっているが、ホームステイ代と交通費を除くと手元にはあまり残らない。彼が、1500円のタバスを買ったとき、「これは高いから月に1、2回しか買わないんだ。」と言ったとき、思わず胸が痛んだ。アメリカ



で、Eddyをほうばる彼の姿はいまはもう、過去のものあり、今彼は新しい土地で奮闘しているのだと、実感した。

このプログラムの目的は、インドネシア僻地での英語教育を通して、現地の英語教師をトレーニングすること。そして、派遣されたアメリカ人が地域に溶け込み、コミュニティに入ることである。現在インドネシアには120人のアメリカ人が僻地でミッションを達成させるために奮闘している。

私は、Eddyの笑っている顔しか印象がない。しかし、Eddyの過去の話を知ったとき、その笑顔の裏にある深い悲しみを知った。

あるある風のこと

実は、お昼副校長先生と食事に行った際、ある出来事が起こっていた。この出来事は私たち二人の日本人だけでなく、Eddyにとっても大きなショックとなった。

インドネシアの人たちはみんな陽気で、私たち日本から来た「外国人」を見ると、笑顔で声をかけてくる。

それは、職員室の先生も、学生も同じだった。副校長先生たちは、私たちと一緒に写真を撮ると、そのまま校長室へと誘った。

私が、日本の社会と比べると、こちらの人たちはいつも笑顔で、とてもいいですね。と述べると、ちょうどスクールが降り出した。インドネシアは今、雨季である。

雨が止んだ頃、私たちは先生方の車に乗り込み、近くのファーストフード店へと行った。3人の副校長方は先に注文し、さっとレジから消えた。

私たちは続いて注文すると、レジの人は「○○いくらです。」と値段を告げた。私たちは振り返った。副校長たちは早々と席に座り、おしゃべりしている。

まさか、と思った。そう、そのまさかだった。私たちは、自分たちの注文したハンバーガー一つずつだけでなく、副校長方三人の注文したセットの料金も一緒に支払った。

私は、食事に誘われたが、自分の分の会計は自分たちでしようと思っていた。しかし思いもよらなかったのは、五十過ぎの副校長三人の方々の会計もしなければならなかったことである。

Eddyは何度か副校長方の方向を振り返ると、失望したように彼らに背を向け、「みんながあなたに笑ってくれないけど、だからといって友達というわけではないんだ。」と言ってお金を支払った。

私にはこの副校長たちの行動が理解できなかった。私はTシャツを脱ぎ、Eddyに彼が支払

った全額を無理やり手渡した。

そしてEddyと話した。話さずにはいられなかった。Eddyは、「これは決してインドネシアの文化ではないよ。これまで他の先生方と食事に行ったときは、先生方が支払ってくれていた。今回初めて副校長方と食べて、僕も本当にびっくりしているよ。えみたちに不快な思いをさせてごめんね。」

席に戻ってきたものの、どうしても笑うことができなかった。親友が、「えみが笑わなかったらEddyが心配するから、笑いなよ。」と言っつても、どうしても笑うことができなかった。

副校長方は、何事もなかったように、私たちに日本について様々な質問をしていた。この時のハンバーガーの味を、私は覚えていない。

沈黙の職員室

私たちはまた車に乗り、職員室に戻ってきた。90年代生まれの三人は、沈黙を続けた。そのとき、それを見かねたのか、副校長の一人が入ってきた。そして、彼にお金を手渡した。

彼は、「僕はすぐに結論に急いでしまっつんだ。彼らを誤解してしまっつたのかも知れない。」と言っつた。

続けて、「彼らは僕を、アメリカから来たお金持ちだと思っつている。でも本当は違っつのだ。」

私たちは、分かっつていた。学校から一番近いファーストフード店に副校長方が初めて来たとは思えないし、支払いの先後を知らなかつたとも思えない。完全にEddyをはめていたことは分かっつていた。だから尚更、悲しくつて、悔しかつた。

私は悲しい顔を隠せなかつた。Eddyが「Don't worry, Emi」と言っつた。私に笑顔がないとき、彼はいつもこう言っつ。上司に裏切られたEddyが一番辛いのだ。

笑顔の裏の悲しい過去

私は、口を開いた。

「私は自分の感情をコントロールできないんだ。嬉しくないとき、悲しいとき、怒っつているとき、どうしてもその気持ちを隠すことができないんだ。まるで子供のように、そのままの感情をむき出しにしてしまっつ。悪い癖っつてわかつつているのに、何人もの人に注意されっつているのに、どうっつても治すことができないんだ。」

私はすでに、涙目になつていた。「副校長先生たちのことはもつ、気にしてないよ。でも、私はまた自分の感情をむき出しにしてしまつた。そのこと、自分自身に悲しくなつてゐるんだよ。」

Eddyは静かに私の話を聞いていっつた。私は続けて話した。



「そこいらまでも後悔っつてゐるのは、母の口ぐさゑも一々耳に響き、母の病氣を回れぬくらいに苦なかつたよ。」

私は、母が病気になってから、その現実を認めたくなくて、認めることができなくて、母が入院しているというのに、アメリカやイギリスに行ってしまった。

最後の一ヶ月は上海から戻ってきてそばにいたけれど、それは遅すぎたんだよ。。。もし過去に戻ることができたら、すべての時間を使って、母のそばにいたい。そして悲しいとき。。。」「

私が涙で言葉に詰まると、Eddyが続けた。

「悲しいときお母さんを思い出すのでしよう。」「うん。。。悲しいとき、こんなに悲しいことがあったんだよ、ってお母さんに伝えたいのに、今はもういない。そして、お母さんのそばに居れなかった後悔を思い出すと、悲しさがもっともっと大きくなるんだ。」「

職員室の先生たちはみんな授業に行き、ここには私たち三人しかいなかった。そしてここで、涙が止まらなくなるとは、思ってもいなかった。Eddyは言った。「えみの気持ちは分かるよ。」「

「あなたには分からないよ。」「私は言い返した。すると彼は話し始めた。「僕が1歳の時、両親は離婚した。父親が出て行った日から、お母さんは僕のことを殴った。」「

高校を卒業するまで、殴り続けた。僕はいま、母を愛しているかわからない。愛せるか分からない。僕は母にさよならを言わずに、アメリカを離れ、インドネシアに来たんだ。」「

いつも笑顔を決やさない彼の、その笑顔の裏にこんな過去があったなんて。。。私は、言葉が見つからなかった。

副校長方に裏切られても、彼は笑っていた。

私は彼に聞いた。

「なんであなたは、辛い時も笑っていられるの?」「

Eddyは言った。

「僕は家族の中で一人だけの男の子なんだ。小さい時からお母さんが、男の子は泣いちゃだめって言ってたんだ。だから僕は、どんな辛い時でも、笑ってきた。」「

Eddy のような人間に出会ったのは、彼のような人間に出会えたことは、私の人生に大きな意味を持たせた。彼の笑顔の奥には、強さがあった。彼の笑顔の奥には、深い悲しみがあった。そして、周りの人を明るくする彼の笑顔の奥には、優しさがあった。

ムスリムと同じ屋根の下で

私は涙を拭いて、次の英語の授業の教室へと歩きだした。心を割って語り合った私たちは、友情の距離が、ぐっと縮まった気がした。



授業が終わると、ホームステイ先の家に帰った。ここはEddyがホームステイしている家で、私たちは空いているもうひとつのゲストルームに泊まらせていただくことになった。

私たちはEddyに習った方法で、お父さんとお母さんの手を取り、自分の額に当てた。

ホストファミリーは最大のおもてなしをしてくれた。毎回食事の際は食べきれない量の食事が用意された。

ホストファミリーは、Eddyを自分の子供のように可愛がっていた。そこでEddyも、自分の両親のように彼らを信頼していた。

一年足らずでインドネシア語をマスターしてしまったEddyは彼らとのコミュニケーションは全く支障がなかった。

見た目もアジア系のため、インドネシア人に間違えられないことさえあった。ホームステイ生活は、「初めて」の体験ばかりだった。

まず、ここには水道がない。

手洗い場とお風呂場は同じで、バスタブのようなものがある。そこに一年中水が貯めてある。その水をすくって、手を洗ったり、体を洗ったりする。トイレも同じく、「想像通り」である。

そして、外に限らず、女性は家の中でも肌を見せてはいけない。

お馴染みの長袖長ズボンである。「ホストファミリーの家に行ったらやっと涼しくなれるね。」と期待を寄せていた私たちは甘かった。

Eddyに注意を受け、お風呂の後も35度の蒸し暑さの中、また完全防御の服に着替えた。さすがに、悲鳴をあげたくなった。

毎晩の時になると、近所の子供たちがホストファミリーの家に集まってきた。

ホストブラザーが、アラブ語の聖書を子供たちに読んで聞かせている。小さい子は三歳ほど、大きい子も10歳程度である。

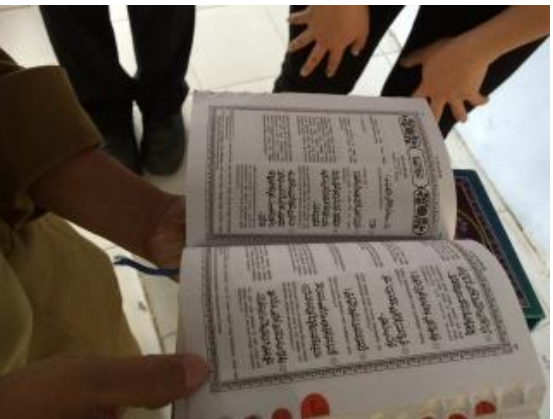
こんなに小さな時から、聖書を読み、お祈りの仕方を勉強するのだ。

SSの無差別テロ、悲しいニュースが続く中で、イスラム教と聞くとなんか引ける人が世界中多いのかもしれない。しかし、この島ではムスリムに生まれ、ムスリムに育っている人たちがいる。

彼らは陽気で、笑顔が絶えなくて、一日の回神にお祈りをして、日本のアニメが大好きで、英語が大好きで、この島には風俗店もない、お酒もない。

冗談を言ったら笑い、悲しいときは涙を流し、道に迷った私たちを快く助けてくれる人たちがいる。

いったいどれほどの人が、イスラム教について、本当に理解してい



るだろう。いったいどれほどの人が、知ることをせず、報道に流されて偏見だけが一人歩きしてしまっているのだろう。。。

ホストファミリーと同じ屋根の下で、笑顔で暮らしている中で、そんなことを考えずにはいられなかった。

もうひとつの日本

私たちが食事のあと、リビングでチェスを楽しんでいると、近所のおばさんが私たち日本から来た「お客さん」を見に来た。

ホームステイに来てから、親戚の人や近所の人など、たくさんの人たちが私たちを見に来られた。

顔をじーと見ると、「見た目は変わらないねえ〜」などといって、日本に関する様々な知っていることを述べては、帰っていった。

しかし、この日のおばあさんはちょっと違った。

遠い親戚だということのおばあさんは、私たちの横に座ると、日本の歌を歌いだした。戦時中、日本のインドネシア占領時代に歌われていた曲である。おばあさんは、日本軍について語りだした。



Eddyは、すべてを翻訳してくれなかった。私たちに気を遣ってくれていたのだ。しかし私は、加害者としての日本の責任を問う発言をする人たちと、何度も話をしたことがある。

それは復旧での授業中でも、南京でもそうであった。だから、歴史を学ぶ学生として、日本人として、気にせず話をしたい、と思った。

おばあさんはもう一度私たちの両頬にキスをすると、帰っていった。

出会いと別れ テレマカシー、インドネシア

あつという間に、インドネシアを離れる日が来てしまった。

お世話になったホストファミリーと、そして尊敬する友人Eddyと別れなければならない日がとうとう来てしまったのだ。

文化のあまりの違いと、初めてのインドネシアの家庭での生活、新しい食べ物。慣れないことばかりで、一日目から「帰りたい、、、」と思ってしまったが、いままではもっとここに居たい。

もっとインドネシアを、イスラム教を、ムスリム



を、そして最高の友達Eddyを理解したいと思った。

テレビやインターネットですぐに手に入る情報。それらはとてつと、片面的のものであって、本当の目で確かめなければ、真実の姿は見ることができない。

私はいま、頭にスカーフを巻いたムスリムの人たちを目にすると、全く違和感を感じない。

それどころか、親近感さえ生じる。彼女たちをみると、インドネシアで、最後まで私たちに大きく手を振ってくれたムスリムの学生の顔が目には浮かばずにはいられないから。

ホストファミリーの優しい笑顔が、目には浮かばずにはいられないから。そこへの土地で頑張る親友Eddyの姿が目には浮かんでくるから。。。

インドネシア Madura 島の島に遊びに来た日々を振り返ることができよう。

